

## 北原白秋



出身：福岡県 柳川市

第一詩集「邪宗門」 第一歌集「桐の花」

耽美派文学・後期浪漫主義

福岡県柳川市の出身。中学を中退後、早稲田大学英文科予科に入学。同級生には土岐善麿らがいる。与謝野鉄幹の誘いで新詩社に参加し、「明星」に詩歌を発表。新進の第一人者とされえるがまもなく脱退。その後、パンの会を創設し、当時の文壇の中心であった自然主義に対抗して耽美派文学を起こし、「スバル」を創刊、後期浪漫主義を主導する。象徴詩の影響を受けた第一詩集「邪宗門」を発表し名声を得るものの、私生活では生家の破産や三度の結婚など波乱の人生であった。第一歌集は「桐の花」で、フランス象徴詩の影響を受け、新鮮な感覚と異国情緒による得意な叙情を示し、短歌に新境地を開いた。その後、鈴木三重吉の「赤い鳥」に参加、童謡の創作に携わった。

春の鳥 な鳴きそ鳴きそ / あかあかと 外の面の草に 日のいる夕べ

はるのとり ななきそなきそ あかあかと とのもののくさに ひのいるゆうべ

- ・二句切れ
- ・あ段、お段の音の多用
- ・な～そ→禁止 ～するな  
な鳴きそ…鳴くな
- ・一、二句→聴覚で、三～五句→視覚
- ・あかあか→擬態語
- ・外の面の草…窓の外の草原
- ・倒置法が使われている(三～五句→一、二句を倒置)
- ・夕暮れ→物悲しい、さびしい
- ・うたわれている情景→春の夕暮れ
- ・体言止め

→なぜ、「鳴くな」？

雰囲気壊す いっそうもの悲しくなる

## 釈 迢空



大阪府出身

本名；折口信夫

国文学者・民俗学者

第一歌集「海やまのあひだ」

大阪府出身。本名は折口信夫で、国文学者・民俗学者。民俗学者の柳田國男と出会い、国文学研究に民俗学的な見地を取り入れる。「アララギ」に参加するも、方向性の違いから脱会し、その後、反アララギの立場をとる。第一歌集は「海やまのあひだ」

(感動の中心)

葛の花 踏みしだかれて、 色あたらし。 / この山道を行きし人あり

→一字明け      →句読点      →句点

- ・三句切れ
- ・踏みしだかれて…踏みにじられて、踏み散らかされて
- ・色あたらし…色鮮やかだ
- ・行きし人あり…行った、通った    し→過去  
    ※あり…いるのだ
- ・句読点の働き→感動の中心を際立たせる
- ・一字あけ→テーマを明確にする    間を作って、対象を印象付ける

## 宮 柊二



新潟県出身

北原白秋の門下生

第一歌集 「群鶏」

歌誌「コスモス」

新潟県出身。北原白秋の門下生となり、「多磨」の創刊に参加する。召集により中国にわたり一兵士として戦い、その後も再招集。この二度の戦争体験は、彼の作風に大きな影響を与えている。第一歌集は「群鶏」。現実を直視し、人間の孤独や存在を探究する作風が特徴。のちに、雑誌「多磨」を受け継ぐ形で歌誌「コスモス」を創刊し、多くの歌人を育てた。昭和40年代からは、たびたび宮中歌会始の選者も務めている。

風かよふ棚一隅に房花の藤揉み合へばむらさきの闇 →体言止め

- ・ かよふ…行ったり来たりして吹き抜ける
- ・ 棚＝藤棚
- ・ 藤揉み合へば…藤の花同士がぶつかったり絡んでこすれ合ったりしていること

※揉み合う⇒擬人法

- ・ 紫の闇→藤の花が集まり重なってできた影などの紫が濃く見える部分

※視点の工夫

→全体から一部へ、焦点化していく

<句切れなし>